

May 2021
会員連絡 No.29

The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism

日本心血管内分泌代謝学会

- ご挨拶：理事長の挨拶
- ご案内：第25回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
- ご報告：第24回日本心血管内分泌代謝学会学術総会
受賞者紹介 高峰讓吉賞/高峰讓吉研究奨励賞/中尾一和賞/若手研究奨励賞
第24回評議員会・総会
- 各種名簿

【第25回日本心血管内分泌代謝学会学術総会】

会長：児島 将康

事務局

〒830-0011

福岡県久留米市旭町 67

久留米大学分子生命科学研究所遺伝情報研究部門

TEL : 0942-35-3311

学会 URL : <http://square.umin.ac.jp/cvmw2021>

日本心血管内分泌代謝学会
事務局

〒600-8441 京都市下京区新町通四条下る四条町343番地1
タカクラビル6階 一般社団法人日本内分泌学会 内
TEL : 075-354-3562 FAX : 075-354-3561 E-mail : cvem@endo-society.or.jp



目次

理事長のご挨拶	2～3
第25回日本心血管内分泌代謝学会学術総会のご挨拶	4
第24回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 開催報告	5～6
第24回日本心血管内分泌代謝学会受賞者プロフィール	
・第24回高峰譲吉賞	7～8
・第24回高峰譲吉研究奨励賞	9～12
・第3回中尾一和賞	13～14
・第24回若手研究奨励賞	15～19
名簿	
理事・監事・幹事	20
名誉会員	21
功労評議員	21
評議員	21
2020年度新入会会員	21
第24回日本心血管内分泌代謝学会評議員会・総会議事録	22～26



----- 理事長からのメッセージ -----

WITH コロナ時代： CVEM の New Normal を探る千載一遇のチャンス

慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科

伊藤 裕

昨年一月、わたくしは、日本心血管内分泌代謝学会（The Society of Cardiovascular Endocrinology and Metabolism, The CVEM Society）の第8代理事長を拝命し、ご挨拶として、「CVEM: Non-Communicable Diseases (NCDs) 医学の王道—その岐路と活路」と題し、メッセージをみなさまに発しました。その時から現在まで、まさに COVID19 に翻弄され続けた一年有余でありました。

そのうちにコロナ禍は終息するだろうとの希望のもと、多くの学会の集会は“とりあえず” Web 形式で実施されました。しかし、コロナ禍は、ワクチン接種も開始されましたが、いまだ終息の兆しが見られない現状であります。今後も WITH コロナ時代は持続するとの覚悟のもと、新しい学会の在り方を模索する時運となっております。BEFORE コロナの時から、すでに岐路に立たされていた我々の学会 CVEM にとっては、有無を言わず、その在り方を考える絶好の機会が与えられたとわたくしは捉えております。

第24回（2020年度）学術総会は、吉村道博会長のもと、International Society for Applied Cardiovascular Biology (ISACB) 2020（会長 ハーバード医学大学院 相川真範先生）を含めた4学会合同で、心血管代謝週間（CVMW）として、2021年3月12日（金）～13日（土）に完全 Web で開催されました。今後、第25回（2021年度）学術総会は、児島将康会長により2021年12月10日（金）～11日（土）に日本血管生物医学会、国際心臓研究学会日本部会（ISHR）、高血圧疾患モデル学会、心筋生検研究会の5学会合同で、やはり完全 Web 開催が予定されています。一方、第26回（2022年度）学術総会は、向山政志会長のもと、国際高血圧学会（ISH）2022 京都のサテライトとして2022年の12月12日（水）（会場：京都国際会館）に、現時点では、オンサイトでの実施が計画されています。

このような時流のなか、現在 CVEM の会員が減少している状況と、NCDs 全般にわたる疾患群をカバーする極めて横断的な学問領域を扱う CVEM の特性を鑑み、2020, 21, 22 年度の学術総会の三会長との話し合いの結果、検討課題として、今後 CVEM は、単体で Web 開催する方向性が出てまいりました。そして、理事の先生方に、学術総会の今後のあり方に関し、2023 年以降の CVEM を Web 学会とする提案に対するアンケートを実施し、結果は、賛成 10 名、慎重判断 2 名、反対 6 名でありました。この結果をもとに、理事会では、闊達な意見交換がなされました。単体 Web 開催を支持する意見としては、学会員が、専門医制度の縛りの中、それぞれの専門領域の学会の参加に汲々とする現状で、Web での参加であれば、参加が容易になるのではないか、他学会との合同開催では、より多くの情報を得られる一方、CVEM の“仲間”として学会を作り上げる意識が低下するのではないか、練られたネットでの意見交換の場が作られれば、若手同士のつながりを強化できるのではないか、などがありました。一方、Web 開催にすると、ただ聴講するだけになりがちで、若い人達が学会にコミットして運営に参加しようという意思が

育たない懸念があるとの反対意見もありました。さらには、学会総会のみならず、ネット上での通年に亘る情報発信、意見交換の場が設けられてもいいのではないかなどの意見もありました。このような議論が戦わされること自体、わたしは、学会にとって、コロナ禍の福音(?)であると思います。そこで、第27回(2023年度)学術総会会長は、デジタル技術に通じておられる下澤達雄理事(国際医療福祉大学 成田病院 臨床検査科)にお務めいただき、現地開催の学会の代替、プランBとしてのWeb学会ではなく、より多くの実りを得ることができる、“攻めの”ヴァーチャル学会総会の在り方を探ってもらうこととなりました。その成果をもとに、2024年以降の在り方を再考したいと考えております。

このような学会改革の機運を受け、このたび、より多くの方の意見を学会活動に反映させたいと考え、3つの常設委員会(庶務委員会、財務委員会、学術委員会)を設置することにいたしました。そして、庶務委員会委員長として向山政志理事、財務委員会委員長として吉村道博理事、学術委員会委員長として児島将康理事が選出されました。今後、この3つの委員会のもとに、多くの若手会員に委員として参画していただき、それぞれの活動側面より、学会の在り方を探り、創意工夫の案を出していただきたいと思いますと考えております。そして、理事長と三委員会委員長による懇談の場を頻回にもち、その意思を学会運営に反映していく所存でおります。先行きまったく不透明なWITHコロナの時代に、正解はないと思います。学会員が不断に、“密”に議論を重ねることでよりよい学会を目指すことが肝要であると考えます。

“Quo Vadis CVEM?”(CVEMの存在意義は果たしてあるのか。あるとすれば、どこへ向かえばいいのか?)

—わたしが昨年1月のご挨拶で投げかけた問いであります。

わたしは、そのなかで、『『内分泌至上主義』—ホルモンは、すべての疾患の理解の基本です。その信念の中で、わたしは、CVEMでは、NCDsのアートとしての医学の実現をめざし、疾患別の臨床学会では表立っては扱わない医学のアプローチを学会として前面に押し出し、フィーチャーしていくことが望まれる』と記載させていただきました。今後、新しい体制の中、CVEMに属する若い医学者が、ホーム感をもって、ONE TEAMで、新しいCVEMを自ら作り上げていくという情熱を持つことができるような運営を目指していきたいと存じます。学会員の皆様におかれましては、このような学会の現状をご理解いただき、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。



第 25 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会のご案内

第 25 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会 (CVEM2021) 会長

久留米大学分子生命科学研究所 教授

児 島 将 康

この度、第 25 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会を 5 学会合同で心血管代謝週間 (CVMW2021) として令和 3 年 12 月 10 日 (金) ~ 11 日 (土) の 2 日間、久留米シティプラザで開催いたします。CVMW2021 のテーマは「融合科学の基盤領域としての心血管研究：その新しい価値の創造」です。今回、5 学会合同で開催することで心血管研究の新しい価値を見出していきたいと考えています。また 2021 年はインスリンが発見されてからちょうど 100 年のメモリアルイヤーです。本会でもインスリンに関連したシンポジウムを企画したいと思います。

ただ現在 (令和 3 年 5 月) でも、本年 12 月での新型コロナウイルス感染の収束は見通せません。そのため、従来のような会場での開催かオンライン開催かをめぐって 5 学会の会長で議論した結果、CVMW2021 はオンライン開催のみ (会場からの発表の配信を含めて) で行うこととなりました。開催方法の判断を感染状況に応じて待つ選択もありましたが、早くに決断したほうが準備をしやすいということで、このような結論になりました。どうかご理解いただければと思います。

参加者のみなさまに有意義な会になるように準備を進めて参ります。どうかよろしくお願いたします。

第 25 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会

(CVMW2021 心血管代謝週間)

会期：2021 年 12 月 10 日 (金) ~ 11 日 (土)

合同開催：

第 38 回国際心臓研究学会

(会長：山口大学医学部・器官病態内科学・矢野雅文)

第 57 回高血圧関連疾患モデル学会

(会長：信州大学医学部・分子病態学・沢村達也)

第 43 回心筋生検研究会

(会長：長崎大学医学部・循環器内科学・前村浩二)

第 29 回日本血管生物医学会

(会長：九州大学・大学院薬学研究院・米満吉和)

会場：久留米シティプラザからのオンライン開催

Cardiovascular And Metabolic Week 2021
CVMW2021
 心血管代謝週間

融合科学の基盤領域としての心血管研究：その新しい価値の創造

2021.12.10 [FRI] → 11 [SAT]

久留米シティプラザ
 〒830-0931 福岡県久留米市中央1-15-21 室1.6.3F
 TEL: 0942-36-3000

<p>第 25 回 日本心血管内分泌代謝学会学術総会 会長 児島 将康 久留米大学分子生命科学研究所遺伝情報研究部門</p>	<p>第 38 回 国際心臓研究学会日本部総会 会長 矢野 雅文 山口大学大学院医学部研究科器官病態内科学</p>
<p>第 57 回 高血圧関連疾患モデル学会学術総会 会長 沢村 達也 信州大学医学部分子病態学</p>	<p>第 43 回 心筋生検研究会学術集会 会長 前村 浩二 長崎大学大学院医学部研究科循環器内科学</p>
<p>第 29 回 日本血管生物医学会学術集会 会長 米満 吉和 九州大学大学院薬学研究院</p>	

問い合わせ先
 株式会社インターアップ久留米校
 〒830-0242 福岡県久留米市中央区東 1-15-21 室1.6.3F
 TEL: 0942-36-3000 FAX: 0942-36-3008
 E-mail: cvmw2021@interup.co.jp

CVMW2020 を終えて

第 24 回 日本心血管内分泌代謝学会学術総会

会 長 吉 村 道 博

会長付幹事 名 越 智 古

第 24 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会（会長 東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科 吉村道博）は、第 28 回日本血管生物医学会学術集会（会長 熊本大学大学院生命科学研究部分子遺伝学講座 尾池雄一）、第 37 回国際心臓研究学会日本部会（会長 神戸大学大学院医学研究科内科学講座・循環器内科学分野 平田健一）、International Society for Applied Cardiovascular Biology (ISACB) 2020（会長 ハーバード医学大学院ブリガム・アンド・ウィメンズ病院循環器科 相川眞範）とともに 2021 年 3 月 12 日（金）、13 日（土）に CVMW2020 心血管代謝週間として共同開催致しました。統一テーマを ‘International Joint Conference on Cardiovascular and Metabolic Diseases’ としました。

もとより本会は、2020 年 12 月に開催予定でありましたが、COVID-19 の影響を受けまして延期になり、さらにオンサイトから完全 WEB 開催となりました。開催形式は以下の通りです。



2021 年 3 月 12 日（金）～13 日（土） ライブ・オンタイム配信

2021 年 3 月 22 日（月）～4 月 5 日（月） オンデマンド配信



WEB 開催とはなりましたが、皆さまより心血管内分泌代謝領域の最新の研究を多数ご発表頂きました。特別講演では、中島秀之先生（札幌市立大学 理事長・学長）から「AI 技術が可能にする社会デザイン / Possibility of AI application toward Societal Design」という近未来の夢のあるお話を頂きました。また、小川誠司先生（京都大学大学院医学研究科

腫瘍生物学 教授）には、「Cancer mutations in normal tissues」という演題でご講演を頂きました。臨床に根ざした Basic Research の重要性を再認識させて頂きました。ともに素晴らしいご



演者 武田朱公先生



座長 中尾一和先生

講演で本学会の大きな柱となりましたことを深く感謝申し上げます。4学会合同シンポジウムでは、WEB上でリレー方式でのシンポジウムと致しました。CVEMとしましては、伊藤 裕 理事長、吉村道博 会長の他、CVEMを代表して香川大学薬理学講座 西山 成 先生に登場頂きました。CVEMの特長を醸し出したユニークなものとなったと思います。その際に作成致しました伊藤理事長のCVEMのご紹介の動画はホームページに掲載しております。是非ご視聴ください。

各賞の受賞者は以下の通りで、誠にありがとうございます。第24回高峰譲吉賞 向山政志先生（写真）、第24回高峰譲吉研究奨励賞 有馬勇一郎先生、吉田陽子先生（写真）、第3回中尾一和賞 武田朱公先生（写真）、YIA 安達裕助先生、長谷川 頌先生、八木宏樹先生、柳澤 洋先生、山田臣太郎先生（五十音順）です。



座長 吉村道博



安達祐助先生



長谷川頌先生



八木宏樹先生



柳澤 洋先生



山田臣太郎先生

今回は完全WEB開催となりましたので皆さまと直接お会いしての議論および懇親は叶いませんでしたが、オンタイム視聴の参加総数は400名を超え、オンデマンドと合わせますとほぼ例年通りの参加者数となるのではないかと関係者一同安堵しており、皆さまのご協力に深く感謝申し上げます。慣れないWEB開催で至らぬ点多々あったことかと思いますが、ご容赦願えれば幸いです。

第25回日本心血管内分泌代謝学会学術総会は、児島将康 会長（久留米大学分子生命科学研究所遺伝情報研究部門）がCVMW2021として合同開催されると伺っております。次回もまた皆様のご協力をどうぞよろしくお願い申し上げます。

第 24 回日本心血管内分泌代謝学会受賞者 プロフィール

第 24 回日本心血管内分泌代謝学会研究賞を受賞されました先生方のプロフィールを掲載いたします。

----- 高峰譲吉賞受賞者 -----

向山 政志 先生 (熊本大学大学院生命科学研究部 腎臓内科学)

受賞対象となった研究

「循環調節ホルモンによる腎臓恒常性維持・破綻と臓器連関に関する研究」



略歴

1983 年	京都大学医学部医学科 卒業
1990 年	京都大学大学院医学研究科博士課程 修了
1991 年	Stanford 大学医学部心臓血管研究所 研究員
2002 年	京都大学大学院医学研究科内分泌代謝内科 講師
2006 年	同 助教授 (准教授)
2013 年	京都大学大学院医学研究科腎臓内科学 准教授
2014 年	熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学 教授
2020 年	熊本大学病院腎・血液浄化療法センター長 併任
2021 年	熊本大学病院副病院長・総合臨床研修センター長 併任

—— 受賞によせて ——

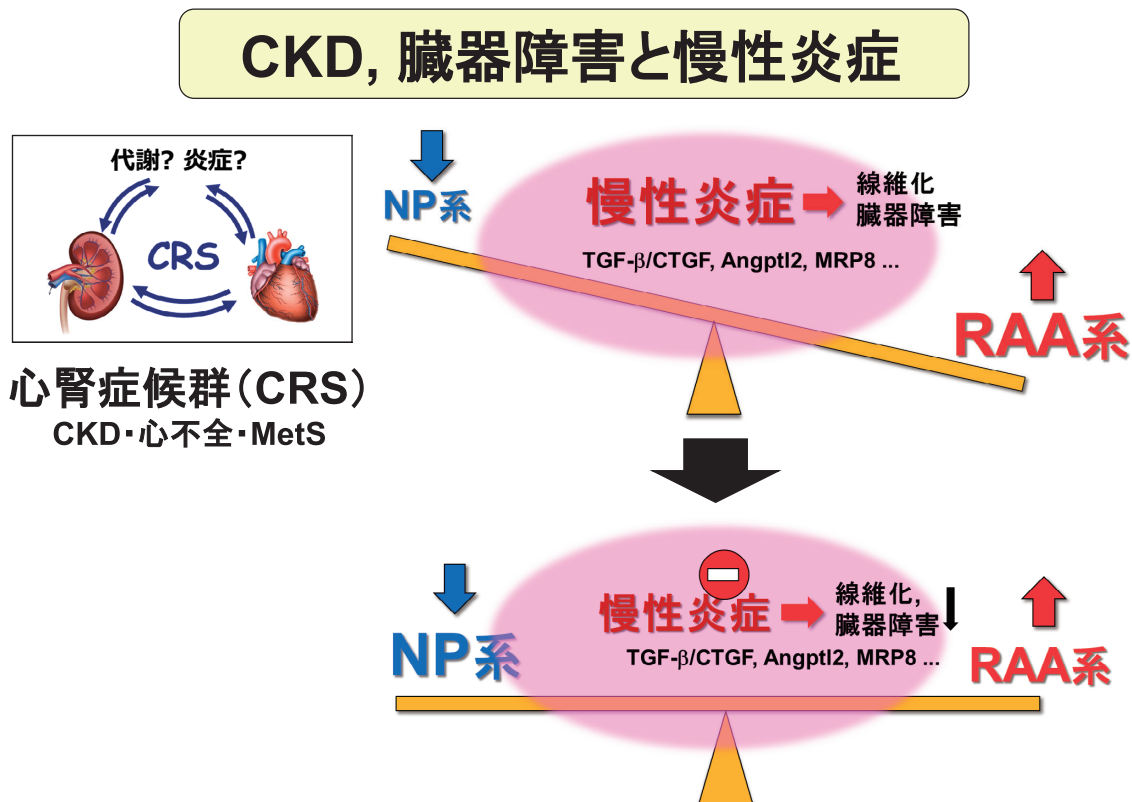
この度の高峰譲吉賞受賞につきまして、身に余る光栄に存じますとともに、改めて身の引き締まる思いです。選考にあられた日本心血管内分泌代謝学会前理事長の北村和雄先生、理事長の伊藤 裕先生はじめ、関係の諸先生方に厚く御礼申し上げます。そして何より、私を臨床研究医 ‘Clinician Scientist’ の道にいざない、ここまでご指導くださいました井村裕夫先生、中尾一和先生、および留学時代のメンターである Victor J. Dzau 博士に心より感謝いたします。

私が卒業した 1980 年代は、ペプチド学・蛋白化学と分子生物学との融合をはじめ、世界中が内分泌学の新たな潮流の真ただ中にあり、わが国はその先頭に立っていました。私は特に神経内分泌学に興味を持ち、井村先生の主宰される京都大学第二内科の門を叩きました。そして中尾先生が率いる「高血圧・神経内分泌研究室」に大学院生として配属され、そこに訪れたのが、私のライフワークとなるナトリウム利尿ペプチド (NP) 系との出会いです。研究室で抗体作製と RIA を習い、西川伸一先生のもとでモノクローナル抗体作製を行い、ANP のサンドイッチ ELISA を作りました。これである程度満足しつつも、成宮 周先生の「研究とは記述的でなく探索的であることが重要」の言葉にはまだ遠いと感じていました。その頃寒川先生らによりブタ脳から BNP が発見され、その研究にシフトします。しかし、いろいろ試しても作った抗体に反応せず、半ば諦めていたところ、並行して進めていたヒト BNP の構造が解明され (アミノ酸がかなり異なる)、早速抗体を作り、われわれで血漿濃縮後の血中濃度を測定しました。しかし

ANPの1/6程度とかなり少なく、大したことはないと思っていたところ、大量の心不全患者2名の血漿が得られ測定してみました。すると値が大幅に振り切れ、再検しても同じで、大変驚くとともに発見することの喜びを知りました。

その後、Stanford大学のDzau博士のもとに留学し、アンジオテンシンIIタイプ2受容体(AT2受容体)プロジェクトに加わります。少々苦労はしましたが、堀内先生はじめ留学仲間にも助けられてクローニングに成功し、論文アクセプトの報をいただいたときは、やっと日本に帰れるなど安心しました。この頃、中尾先生から腎臓研究室を立ち上げたという知らせをいただき、NP系とRAA系の接点である「腎臓病学」を私の専門領域とすることを決めました。帰国後、田中一成先生、菅原 照先生から臨床の指導を受けるとともに、NP系の腎保護作用をテーマに研究を始めました。そして、多くの大学院生にも恵まれ、BNP過剰発現マウス、GC-A欠損マウスを用いて、種々の腎保護作用を示しました。今後、臨床で使用が進むARNI(アンジオテンシン受容体-ネプリライシン阻害薬)の作用を検討することでさらに検証したいと思います。

熊本大学に着任後は、新たなプロジェクトとして生活習慣病における腎内慢性炎症の機序とその意義、特にMRP8とANGPTL2という分子に着目して研究を行っています。また、地域における社会啓発としてCKD対策活動を行政とともに推進しています。今回の高峰譲吉賞の受賞を励みとして、私のベースである内分泌代謝学からみた腎臓病学の観点を忘れず、さらなる研究展開とともに社会貢献に尽力したいと思います。



受賞者-1

有馬 勇一郎 先生 (熊本大学国際先端医学研究機構 (IRCMS)
心臓発生研究室 特任准教授 (主任研究員))

受賞演題

「ケトン体代謝を介した心血管代謝調節機構の解明」



略歴

2004年	熊本大学医学部卒業
2013年	東京大学大学院医学系研究科博士課程修了
2013年	熊本大学病院循環器内科 特任助教
2015年	国立循環器病研究センター研究所 上級研究員
2018年	熊本大学大学院生命科学研究部循環器内科学 助教
2021年	熊本大学国際先端医学研究機構 (IRCMS) 特任准教授 (主任研究員)

—— 受賞によせて ——

日本心血管内分泌代謝学会会員の皆様、熊本大学の有馬と申します。私は本年3月に開催された日本心血管内分泌代謝学会において、「ケトン体代謝を介した心血管代謝調節機構の解明」という研究テーマで第24回高峰讓吉研究奨励賞を受賞いたしました。本賞は私の尊敬する先生方が数多く受賞されている賞です。自分自身が受賞できたことを大変光栄に感じるとともに、身の引き締まる思いです。改めて、これまで研究をご支援いただいた先生方に深く感謝申し上げます。

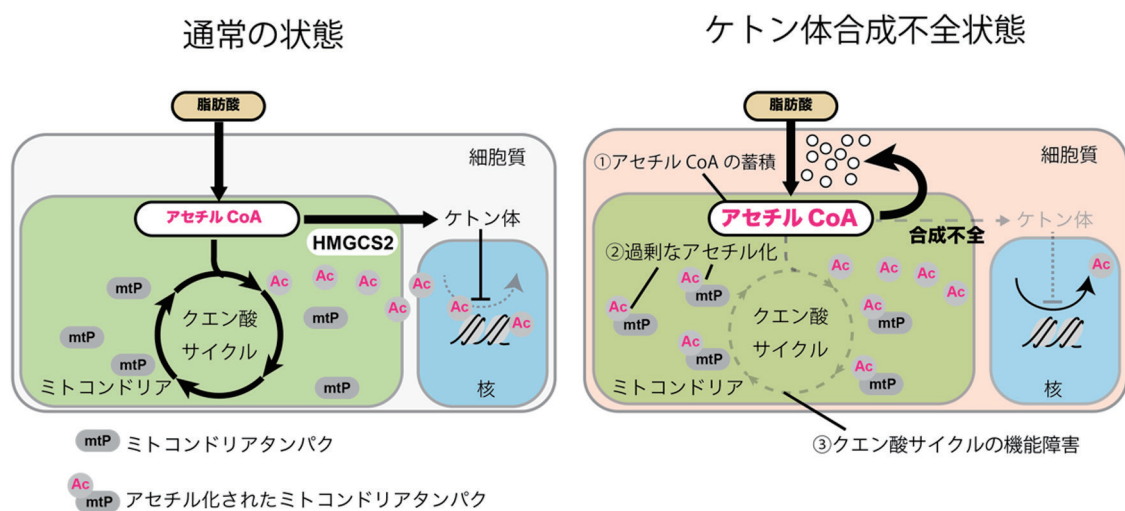
私が研究に興味を持ったのは熊本大学医学部在学中に遡ります。当時、栗原裕基先生が熊本大学発生医学研究センターで細胞識別分野を主宰しておられ、私は栗原研にアルバイトとして出入りするようになったことをきっかけに、基礎医学研究、特に発生学の面白さを知りました。平成16年に熊本大学医学部を卒業後、初期臨床研修を経て平成18年に熊本大学循環器内科に入局し、循環器診療のトレーニングに励みましたが、発生学を勉強したい思いも強く、再び栗原先生の指導を受けるため、平成21年からは東京大学大学院医学系研究科 代謝生理化学分野に進学させていただきました。大学院の間に栗原先生よりご指導いただき、研究者としての考え方を養うことができたのは、現在も私の柱となっています。

平成25年に熊本大学に復職してからは、臨床研究にも携わりながら、もっと臨床の研鑽を積むべきか、基礎研究をもっと深めるべきなのか悩んでおりました。そうした折に、国立循環器病研究センター研究所・分子生理部の中川修先生よりお声かけいただき、研究員として勉強させていただく機会を得ました。中川先生は私が基礎研究を続ける道筋を与えてくれた先生であり、今も感謝しております。

平成28年より再び熊本大学に戻り、辻田賢一先生の指導のもとで、今回の受賞テーマにつながるケトン体代謝の研究に取り組みました。熊本大学循環器内科の伝統であるAo-CS採血を利用して、心臓にて消費されるケトン体の利用率が、心筋虚血によって大きく低下することを報

告しました (Arima Y et. al., JACC 2019)。同時期より基礎研究も並行して開始し、新生児期に充進するケトン体合成能の意義を明らかにするため、ケトン体合成の律速段階酵素 (HMG-CoA synthase2; Hmgcs2) を破壊したノックアウトマウスを作成しました。新生児期に注目するとケトン体合成不全マウスはひどい脂肪肝になることがわかり、原因を調べていくと、ケトン体合成にはミトコンドリアタンパクの過剰なアセチル化を緩和することで、ミトコンドリアを保護する作用があることがわかりました (下図)。肝臓という不慣れな臓器でしたが、ケトン体代謝の新たな機能を発見することができました (Arima Y et. al., Nature Metabolism 2021)。

これまでの私の歩みを振り返ると、多くの会員の先生方との出会いが、確実に私の人生の糧になっています。紙面では紹介できませんでしたが、他にも多くの会員の先生方にもお世話になっておりますので、この場を借りて御礼申し上げます。最後に、今年度より熊本大学国際先端医学研究機構 (International Research Center for Medical Sciences ; IRCMS) に異動となり、心臓発生研究室を主宰することとなりました。幸いなことに、多方面からご支援いただいておりますので、これを励みとして研究に邁進してまいりたいと思います。



受賞者-2

吉田 陽子 先生 (新潟大学大学院医歯学総合研究科 循環器内科学・
先進老化制御学講座 (受賞時)
順天堂大学大学院医学研究科 循環器内科学・
先進老化制御学講座 (2021/4/1~異動))

受賞演題

「老化シグナルを介した心血管代謝疾患の発症メカニズムの解明」



略歴

2005年	千葉大学医学部医学科卒業
2005年	東京都立墨東病院 初期臨床研修
2007年	財団法人日本心臓血圧研究振興会附属榊原記念病院 後期研修
2009年	千葉大学医学部附属病院 循環器内科
2010年	千葉大学グローバル COE リサーチアシスタント
2013年	千葉大学大学院医学薬学府博士課程修了 (医学博士)
2013年	新潟大学医歯学総合病院 循環器内科
2014年	新潟大学大学院医歯学総合研究科 先進老化制御学 特任助教
2021年	順天堂大学大学院医学研究科 先進老化制御学 特任准教授

—— 受賞によせて ——

この度は、栄誉ある高峰讓吉研究奨励賞を賜り、誠にありがとうございます。日本心血管内分泌代謝学会の諸先生に厚く御礼申し上げます。

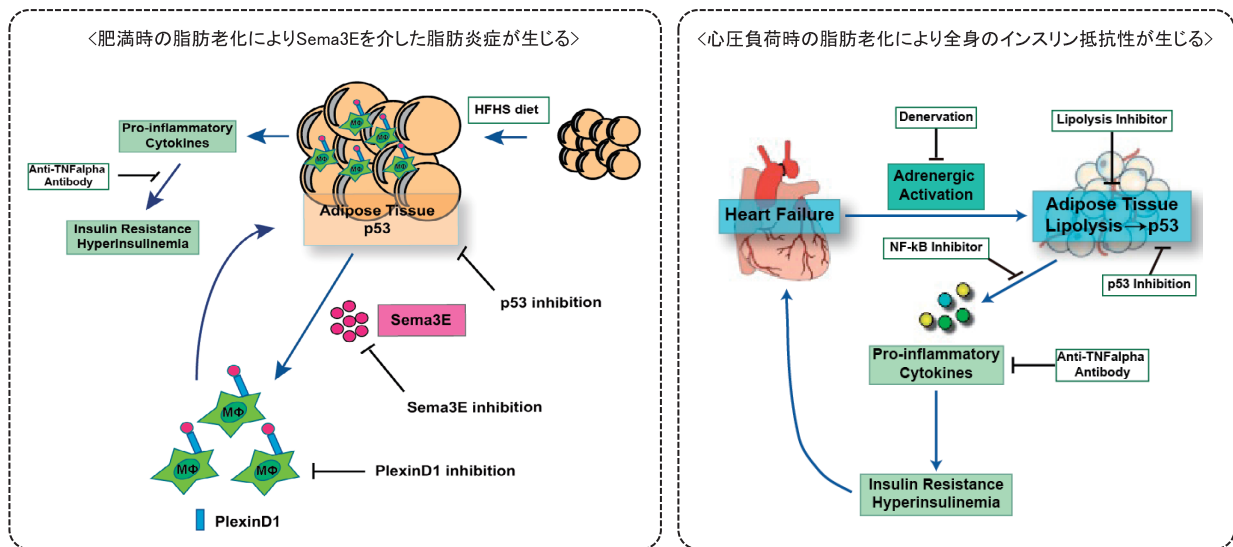
老化に伴い、心血管疾患や代謝疾患、悪性腫瘍などが増加し、またフレイルなどの個体としての機能低下も生じてくることから、老化がどのようにしてこれらを引き起こすのかを解明することは非常に重要であると考えられますが、私はこれまで、細胞レベルの老化が個体老化の一部の形質、特に病的な形質を担うという仮説に基づいて老化研究を行い、p53 依存性の老化シグナルがどのように血管老化や心不全、肥満や糖尿病といった加齢関連疾患の病態に関与しているかについて研究を進めてまいりました。

以前我々の研究グループでは、肥満マウスの内臓脂肪組織では p53 依存性の脂肪細胞の老化を介して脂肪組織の炎症が誘導され、糖尿病が惹起されることを明らかにしましたが、私はさらに、分泌型タンパクである Sema3E が p53 の下流分子であり、肥満に伴う内臓脂肪細胞の p53 の活性化によって Sema3E の発現が亢進すること、これにより Sema3E の特異的受容体であるプレキシシン D1 陽性マクロファージが脂肪組織に誘導され、脂肪組織での炎症が惹起されることを見出しました。さらに、新たな糖尿病治療として Sema3E に対するペプチドワクチンを開発し、Sema3E-プレキシシン D1 シグナルの抑制により肥満マウスモデルの糖代謝異常が改善することを明らかにしました。

また慢性心不全時に全身のインスリン抵抗性が生じる機序は明らかではありませんでしたが、私は過剰な交感神経緊張に伴う脂肪融解による p53 の活性化が、脂肪組織で炎症を引き起こし、これによって全身のインスリン抵抗性が引き起こされることを明らかにしました。さらに私は、心不全時に過剰に活性化した交感神経シグナルにより、心臓組織での血管内皮細胞や骨髄細胞において p53 の発現が亢進することにより、血管内皮細胞では intercellular adhesion molecule-1 (ICAM-1) が、骨髄細胞ではインテグリンの発現が増加し、これらの相互作用を介して心不全時の心臓での炎症が惹起されることを見出しました。これらの研究結果より、p53 を介した炎症メカニズムを制御することで、糖尿病や心不全に対する新たな治療法を創出できる可能性があると考えられました。

また最近では、心不全時に褐色脂肪の機能不全が起こることで代謝リモデリングを生じ、これにより蓄積した褐色脂肪由来代謝産物が心不全の病態形成に重要な役割を果たしている可能性を見出しており、現在その機序の解明に取り組んでいるところです。

超高齢社会において、肥満、糖尿病、心不全などに対する治療ニーズはますます増加することが予想されることから、代謝ネットワークや臓器間の相互作用を標的としたこれらの病態に対する新たな治療法の開発を目指して、一層精進してまいりたいと考えております。



武田 朱公 先生 (大阪大学 大学院医学系研究科 臨床遺伝子治療学
寄附講座)

受賞対象となった研究

「認知症と心血管内分泌代謝疾患の病態連関とトランスレーショナル
リサーチ」



略歴

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 2004年 | 北海道大学医学部医学科 卒業 |
| 2010年 | 大阪大学大学院医学系研究科 博士課程修了 |
| 2011年 | 東京大学大学院医学系研究科 特任助教 |
| 2011年 | 日本学術振興会 特別研究員 PD (米国ハーバード大学医学部) |
| 2013年 | 日本学術振興会 海外特別研究員 (米国ハーバード大学医学部) |
| 2015年 | 米国ハーバード大学医学部・マサチューセッツ総合病院 研究員 |
| 2016年 | 大阪大学大学院医学系研究科 寄附講座准教授 |

—— 受賞によせて ——

この度、中尾一和賞という名誉ある賞を賜りましたことは身に余る光栄です。中尾先生、選考委員の先生方、これまでご指導をいただいた先生方には改めて御礼を申し上げます。

私は大学卒業後、現所属の大阪大学の森下竜一先生の教室に入門し、認知症の基礎研究を始めました。また、臨床教室としては同老年医学教室（荻原俊男前教授、樂木宏実教授）に所属させて頂き、老年医学や認知症の臨床を学ばせて頂きました。医師としてのキャリアの早期から、老年医学の臨床を学びながら認知症の基礎研究に取り組む環境に恵まれたことは、トランスレーショナルリサーチを奨励する本賞に繋がる基盤となったと思います。基礎と臨床を繋ぐ貴重な環境を与えて下さった森下先生、里先生、荻原先生、樂木先生には改めて感謝を申し上げたいと思います。

大学院生として研究を始めた当時、生活習慣病や代謝疾患、特に糖尿病がアルツハイマー病のリスク因子であることが疫学的に明らかにされ注目されていましたが、その背景病態は不明のままでした。そこで、両疾患を合併する動物モデルを作製してその病態を解析するという研究を行いました。糖尿病を合併したアルツハイマー病マウスは認知機能障害が重篤化し、これには神経病理を形成するアミロイドβによる脳血管障害が影響していること等を明らかにすることが出来ました。

大学院卒業後は米国ハーバード大学のBradley Hyman教授の研究室へ移動し、アルツハイマー病タウ病理に関連する基礎研究に取り組みました。当時、神経変性疾患に関連する病的蛋白が細胞間を“伝播”するという現象が注目されており、タウ蛋白もその一つと考えられていました。この研究を治療法開発へ結びつける一番の早道は、タウ伝播を介在する特定の分子種を同定

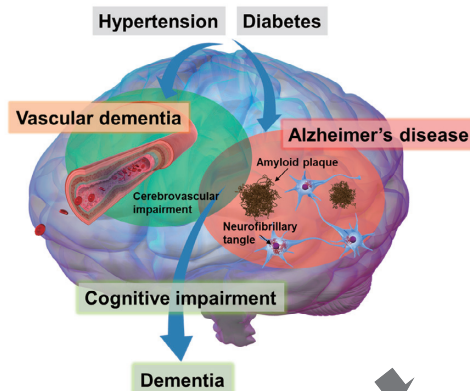
することであると考え、患者剖検脳を用いて伝播に関わるタウ分子種を見つける研究に取り組みました。また留学中は、認知症患者の診察にあたる機会にも恵まれました。患者を診て脳内の分子病態を想像し、分子病態を考えて患者を診るというサイクルは、疾患研究の醍醐味であると感じました。

中尾一和先生には大学院生の頃から、学会などを通して直接・間接に御指導を賜って参りました。大学院生の頃、中尾先生が座長をされるセッションで発表する際は、いつも大変緊張したことを今でもよく覚えております。拙い私の発表に対しても、中尾先生はいつも本質的で厳しい質問を下さりました。壇上では上手く答えることが出来ず自分の力不足を感じるばかりでしたが、質問して頂いた内容は一つ一つ鮮明に記憶に残っております。基礎的な発表内容に対しても、中尾先生のご質問には必ずトランスレーショナルリサーチを意識させる要素が含まれていたことが、10年以上経った今になって分かることがあります。

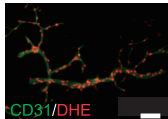
コロナ禍を受けて今回は授賞式も Web 形式となりましたが、当日に中尾先生から頂戴した、「医学研究であるからには、必ず臨床応用を考えて。簡単なことではないが、臨床応用まで辿り着ける本物の研究を。」というメッセージは心に刻まれました。認知症研究は、基礎研究は進んでおりますが、臨床応用までのハードルが高いとされる典型的な学問領域です。まだまだ未熟で力不足ですが、何十年かけても、臨床で患者さんの役に立てる研究成果を出せるよう、今後も精進して参ります。

認知症の危険因子としての心血管内分泌代謝疾患

血管性危険因子とAlzheimer病



RASとAlzheimer病

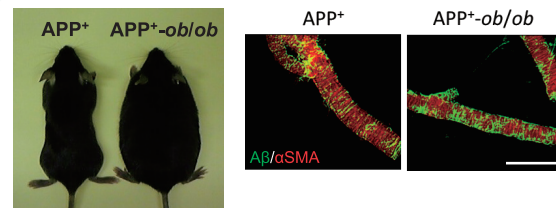


Takeda et al. *Hypertension* 2009
 Takeda et al. *Frontiers in Bioscience* 2009
 Takeda et al. *Brain Research* 2009
 Takeda et al. *Horizons in Neurosci. Res.* 2010

周辺症状と脳血管病変

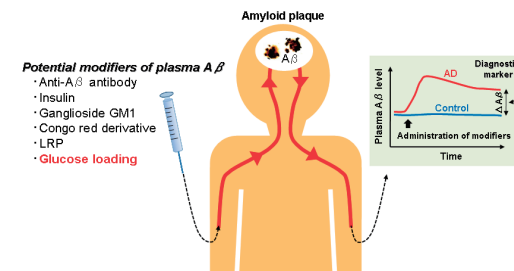
Takeda et al. *Neurobiology of Aging* 2013
 Takeda et al. *Front. Aging Neurosci.* 2014

糖尿病合併Alzheimer病マウスモデル



Takeda et al. *PNAS* 2010
 Takeda et al. *Molecular BioSystems* 2011
 Takeda et al. *Neuroscience* 2011

糖負荷を利用したAlzheimer病診断指標



Takeda et al. *BBRC* 2009
 Takeda et al. *Molecular BioSystems* 2010
 Takeda et al. *Dementia and Geriatric Cognitive Disorders* 2012

受賞者 - 1

安達 裕助 先生 (東京大学医学部附属病院循環器内科)

受賞演題

[Pathophysiological role of browning of perivascular adipose tissue in the development of vascular remodeling]



略歴

2011年	東京大学医学部医学科卒業
2011年	東京大学医学部附属病院 初期臨床研修医
2013年	自治医科大学附属さいたま医療センター 臨床助教
2016年	東京大学大学院医学系研究科 博士課程入学
2019年	日本学術振興会 特別研究員
2020年	東京大学大学院医学系研究科 博士課程修了
2020年	東京大学医学部附属病院循環器内科 特任研究員

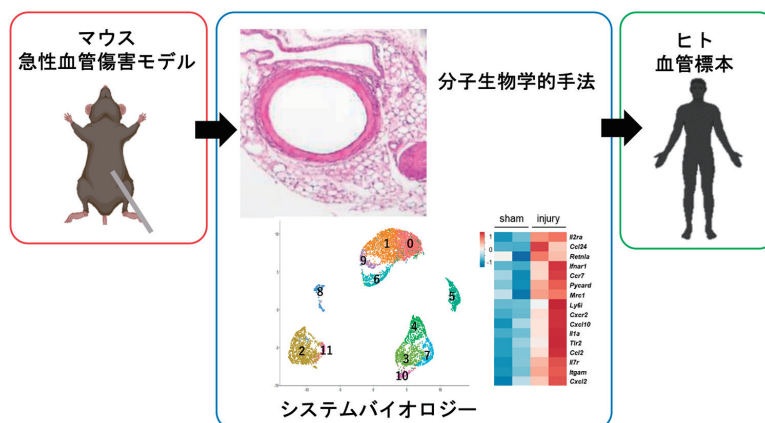
— 研究内容および抱負 —

この度は、第24回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞に選考頂き、誠にありがとうございます。学会長の吉村道博先生、選考委員の先生方、ならびに関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

ヒト、マウスともに、血管周囲には血管周囲脂肪組織 (perivascular adipose tissue; PVAT) と呼ばれる支持組織が存在していることが知られています。しかし、PVATが血管の炎症、リモデリングを制御する機構については未だ十分に分かりません。私達の研究グループでは、マウスの血管傷害モデルを用いた分子生物学的手法に加えて、システム生物学的手法を用いた解析を行い、血管炎症とリモデリング制御におけるPVATの役割を明らかにすることを目的に研究を行っています。

私達は、マウス組織の網羅的遺伝子発現解析の結果をもとに、血管傷害後のPVATにおいて褐色化と呼ばれる現象が起こっていることを見出しました。その意義に関しては遺伝子改変マウスや培養細胞を用いた実験によって解明を進めています。また、褐色化した脂肪細胞から分泌されるアディポカインを同定するために、近年生物学研究への応用が進んでいる一細胞解析技術も併用し、この現象の詳細なメカニズムの解明に挑んでいます。最終的にはヒトにおいて、動脈硬化の新たな治療標的を創出することを目標に今後も研究に励んでいく所存です。

最後にこの場をお借りして、日頃よりご指導頂いております東京大学循環器内科 小室一成教授、上田和孝先生、瀧本英樹先生、理化学研究所生命医科学研究センター 伊藤薫先生をはじめ御支援・御協力賜りました皆様に深く御礼申し上げます。

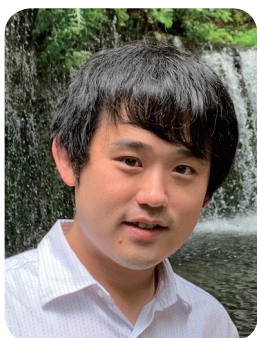


受賞者-2

長谷川 頌 (東京大学大学院医学系研究科 慢性腎臓病病態生理学)
(研究当時: 東京大学大学院医学系研究科 腎臓内科学)

受賞演題

[Activation of sympathetic signaling in macrophages blocks systemic inflammation and protects the kidney from ischemia/reperfusion injury]



略歴

2012年3月	東京大学医学部医学科 卒業
2012年4月	国立国際医療研究センター病院 初期臨床研修医
2014年4月	国立国際医療研究センター病院 腎臓内科後期レジデント
2016年4月	東京大学大学院医学系研究科 医学博士課程 (腎臓内科学) 入学
2020年3月	同上卒業・学位取得
2020年4月	日本学術振興会 特別研究員 (PD)
2021年4月	東京大学大学院医学系研究科 慢性腎臓病病態生理学 特任助教

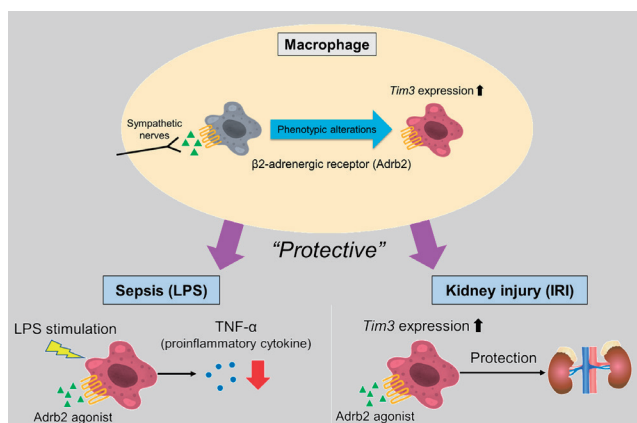
—— 研究内容および抱負 ——

このたびは第24回日本心血管内分泌代謝学会若手研究奨励賞にご選出いただき、誠にありがとうございます。歴史ある素晴らしい賞をいただき、大変光栄に思います。

腎臓は糸球体・尿細管・血管など様々な構造が動的に絡み合って機能する複雑な臓器です。私はこの複雑系を理解するためには腎臓全体を包括的に捉える視点が必要なのではないかと考え、組織透明化による3次元病理学 (*Kidney Int*, 2019)・エネルギー代謝のマルチオミックス解析 (*Kidney Int*, 2020)などを駆使して腎臓病の研究を行ってきました。中でも、今回の受賞テーマである「自律神経系と腎臓病」に関する研究には以前から取り組んでおり、2019年には腎臓全体の交感神経の分布を3次元で可視化し、腎虚血再灌流障害後に交感神経の脱落が生じていることを明らかにしております (*Kidney Int*, 2019)。

今回の研究では少し視点を変えて、交感神経-免疫-腎臓病の関係について検討しました。まず *in vitro* の系において交感神経刺激 (β_2 アドレナリン受容体刺激)によってマクロファージの炎症応答が抑制されることを確認し、免疫チェックポイント分子である Tim3 の発現上昇がその抗炎症変化に寄与することを示しました。さらに、*in vivo* においても β_2 アドレナリン受容体刺激薬の投与は敗血症モデルにおける全身炎症や虚血再灌流による腎局所の炎症を軽減することが分かり、マクロファージ特異的 β_2 受容体ノックアウトマウスによる実験やマクロファージ移入実験を行うことで、これらの抗炎症効果にマクロファージの交感神経シグナルが中心的な役割を果たすことを証明しました。また、交感神経刺激を与えたマクロファージを移入した後に虚血再灌流を行った腎組織のシングルセル RNA-seq では Tim3 発現マクロファージが増加しており、これらのマクロファージが腎臓を保護していることを示唆する結果でした。以上より、交感神経刺激によるマクロファージの抗炎症性変化は Tim3 の発現上昇に一部媒介され、その形質変化は直接的に全身炎症および腎局所の炎症を軽減することを明らかにしました (*JASN*, 2021)。

今回の受賞を励みにして、今後も腎臓病研究に邁進していく所存です。今後ともどうぞご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



受賞者 - 4

柳澤 洋 先生 (京都大学大学院医学研究科 循環器内科学)

受賞演題

[Significance of endothelial CNP-GC-B system in the development of pulmonary hypertension]



略歴

2011年 滋賀医科大学医学部医学科卒業
2017年 京都大学大学院医学研究科 博士課程入学

— 研究内容および抱負 —

この度は第24回日本心血管内分泌代謝学会学術総会において若手研究奨励賞という栄えある賞を賜りまして、大変光栄に存じます。選考委員並びに関係者の皆様に御礼申し上げます。

我々の研究室では、これまでにナトリウム利尿ペプチドと心疾患に関連して多くの基礎的研究から展開し、診断・治療への応用を実践して参りました。

肺高血圧症は、近年種々の薬剤が臨床応用されているにも関わらず依然予後不良の疾患で、基礎的研究も精力的に行われており、ナトリウム利尿ペプチドの役割についての報告もなされてきておりますが、依然としてCNP-GC-B系の肺高血圧症の進展における役割の詳細は不明であります。

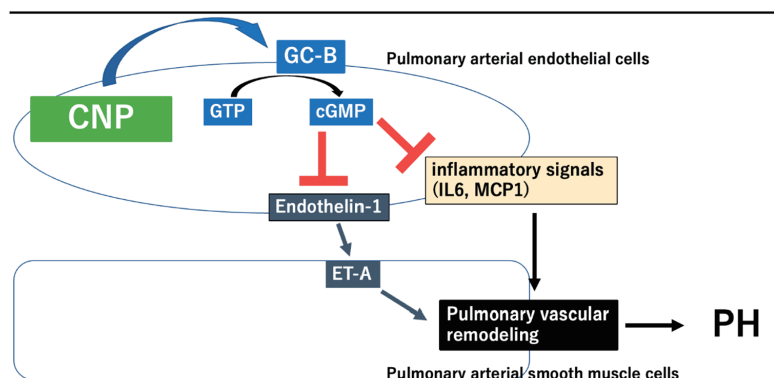
そこで今回我々は、肺高血圧症モデル動物や、ヒト肺動脈血管内皮細胞を用いて肺高血圧症発症進展におけるCNP-GC-B系の意義について検討しました。CNP-GC-B系の血管保護作用は血管平滑筋のGC-Bを介した作用とこれまで考えられていましたが、我々はCNPが内皮由来のGC-B系を介して、エンドセリン経路の抑制や炎症系シグナルの抑制をすることで肺高血圧症の進展に対して保護的に作用している事を見いだしました。今後も、この度の受賞を励みとし、更なる周辺や下流のシグナルの探索、実臨床への応用に向けてますます努力していく所存です。

若輩ではございますが、本賞に恥じぬよう精一杯努力を重ねて参りますので、引き続きご指導並びにご支援の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、本研究においてご指導いただきました、研究グループの中川靖章先生、信州大学の桑原宏一郎教授をはじめ京都大学循環器内科および共同研究者の皆様がこの場をお借りして改めて心より御礼申し上げます。

この度は誠にありがとうございました。

Role of endothelial GC-B-CNP system in PH



受賞者 - 5

山田 臣太郎 先生 (東京大学医学部附属病院循環器内科)

受賞演題

[Integrative Analysis of Spatial Transcriptomics and Single Cell RNA-seq Reveals the Spatiotemporal Mechanism of Cardiomyocyte Adaptation after Myocardial Infarction]



略歴

2012年	東京大学医学部医学科卒業
2012年	藤枝市立総合病院
2013年	東京大学医学部附属病院
2014年	日本赤十字社医療センター
2017年	東京大学大学院医学系研究科 内科学専攻医学博士課程入学

—— 研究内容および抱負 ——

【研究内容】

<背景>

心筋梗塞における心筋不全化過程の遺伝子発現変動および制御は明らかでない。

<方法>

心筋梗塞モデルマウスの心臓組織空間的 RNA-seq および一細胞 RNA-seq の統合解析により、心筋梗塞後の心筋不全化を制御する因子を同定し、その機能解析を in vivo knock-down 解析により検証した。

<結果>

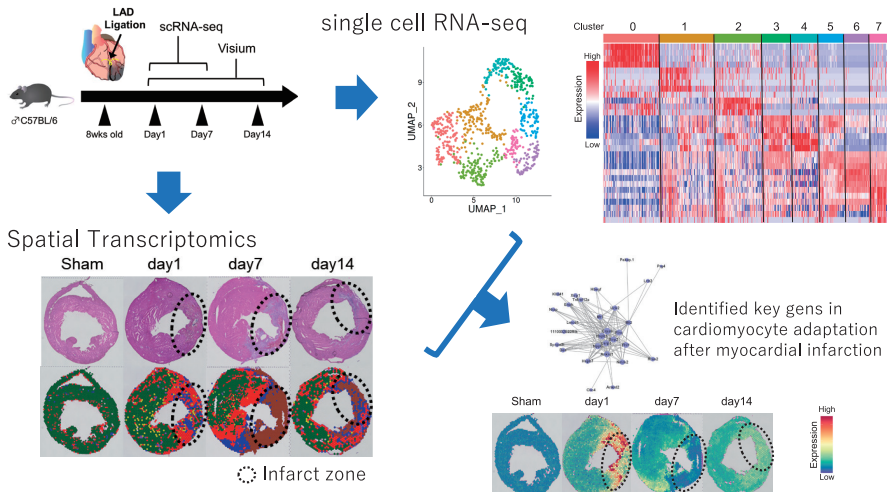
心筋梗塞モデルマウスの心臓組織空間的 RNA-seq により、心筋梗塞後には各種遺伝子が時間的・空間的にパターンを持って大きな変動を示すことが分かった。その中で心筋梗塞後急性期に梗塞巣辺縁領域を中心に発現が増加する遺伝子群を同定した。Nppb や Cryab 等の心不全マーカーを含むその遺伝子群の中で、中心的な役割を果たす因子としてストレッチ応答シグナル因子である Csrp3 を同定した。Csrp3 は急性期に梗塞巣辺縁領域で発現が増加し、発症 14 日後には定常状態に戻った。また、一細胞 RNA-seq 解析より Csrp3 は心筋細胞で特異的に発現していることを確認した。心筋梗塞後急性期の残存心筋では代償的に Csrp3 の発現が増加し、心保護的に作用していることが示唆された。さらに shCsrp3 搭載 AAV9 ベクターによる Csrp3 knock-down を行ったマウスに対して心筋梗塞を作成して解析したところ、対象群と比較して有意に梗塞後の心拡大や心収縮能低下を認めた。

<結論>

心筋梗塞後急性期に梗塞巣辺縁領域特異的に発現が増加するストレッチ応答シグナルは心筋細胞の不全化を制御しており、新規治療ターゲットとなり得る。

【抱負】

新たな実験手法や解析手法を取り入れつつ、心疾患の病態解明の一助となる研究を行っていきたい。



日本心血管内分泌代謝学会役員名簿

■理事長

伊藤 裕 慶應義塾大学医学部腎臓内分泌代謝内科

■副理事長

吉村 道博 東京慈恵会医科大学内科学講座循環器内科

■理事

市原 淳弘 東京女子医科大学内分泌疾患総合医療センター高血圧・内分泌内科

小川 佳宏 九州大学大学院医学研究院病態制御内科学

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科分子細胞代謝学分野

柏原 直樹 川崎医科大学腎臓・高血圧内科

北村 和雄 宮崎大学医学部内科学講座循環体液制御学分野

栗原 裕基 東京大学大学院医学系研究科生化学分子生物学講座代謝生理化学分野

桑原宏一郎 信州大学医学部循環器内科学教室

児島 将康 久留米大学分子生命科学研究所遺伝子情報研究部門

小室 一成 東京大学大学院医学系研究科循環器内科学

斎藤 能彦 奈良県立医科大学第一内科

下澤 達雄 国際医療福祉大学成田病院臨床検査科

新藤 隆行 信州大学医学部医学科循環病態学教室

田村 功一 横浜市立大学医学部循環器・腎臓・高血圧内科学

西山 成 香川大学医学部薬理学

深水 昭吉 筑波大学生存ダイナミクス研究センター

中川 修 国立循環器病研究センター研究所分子生理部

南野 徹 順天堂大学大学院医学研究科循環器内科

益崎 裕章 琉球大学大学院医学研究科内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科)

向山 政志 熊本大学大学院生命科学研究部腎臓内科学

柳沢 正史 筑波大学国際統合睡眠医科学研究機構(WPI-IIIIS)

樂木 宏実 大阪大学大学院医学系研究科老年・総合内科学

■監事

菅波 孝祥 名古屋大学環境医学研究所分子代謝医学分野

長瀬 美樹 杏林大学医学部解剖学教室(肉眼)

■幹事

岸 拓弥 国際医療福祉大学福岡保健医療学部

佐藤 貴弘 久留米大学分子生命科学研究所遺伝情報研究部門

徳留 健 国立循環器病研究センター研究所生化学部

■名誉会員【37名】

荒川規矩男	稲上 正	稲田 満夫	井村 裕夫	岩尾 洋	梅村 敏	江藤 胤尚
荻原 俊男	片山 茂裕	寒川 賢治	木之下正彦	小島 至	齊藤 壽一	猿田 享男
島本 和明	鈴木 洋通	高橋 伯夫	竹田 亮祐	田中 一成	富田 公夫	永井 良三
中尾 一和	中川 雅夫	成瀬 光栄	名和田 新	平田結喜緒	藤田 敏郎	眞崎 知生
松尾 壽之	松岡 博昭	宮森 勇	村上 和雄	矢崎 義雄	泰江 弘文	吉永 馨
吉見 輝也	吉村 学					

■功勞評議員【85名】

安部 陽一	飯利 太朗	池本 文彦	石川 三衛	石田 均	石橋みゆき	伊藤 貞嘉
伊藤 宏	井上 達秀	今泉 勉	岩崎 泰正	岩本 安彦	内田 健三	浦 信行
浦田 秀則	大磯ユタカ	岡村 富夫	小川 久雄	小野 美明	柏木 厚典	川口 秀明
河野 雄平	河邊 博史	河南 洋	菊池健次郎	木越 俊和	木曾 良明	木村 定雄
木村 時久	久代登志男	熊井 俊夫	倉林 正彦	河野 雅和	後藤 淳郎	塩之入 洋
重富 秀一	七里 眞義	菅原 照	瀬戸 信二	相馬 正義	高木耕一郎	高須 信行
高野加寿恵	高原 二郎	高柳 涼一	竹越 襄	武田 仁勇	千原 和夫	辻井 悟
蔦本 尚慶	東條 克能	徳留 悟朗	戸恒 和人	中村 元行	成宮 周	西川 哲男
西村 和修	橋爪 潔志	橋本 隆男	林 晃一	檜垣 實男	平井 愛山	平田 恭信
廣江 道昭	広瀬 茂久	福井 清	藤原 久義	榊田 出	松浦 秀夫	松澤 佑次
水野 兼志	南野 直人	宮崎 滋	宮崎 瑞夫	村上 治	村木 篁	森井 成人
森瀬 敏夫	保嶋 実	山路 徹	山下 博	山本 格	家森 幸男	吉政 孝明
渡辺 毅						

■評議員【181名】

赤澤 宏	浅原 哲子	芦澤 直人	荒井 宏司	有馬 秀二	安藤 孝	池田 惠一
池田 康将	石上 友章	石川 義弘	石田 純治	泉 康雄	泉 裕一郎	泉家 康宏
市原 淳弘	一色 政志	伊東 宏晃	伊藤 裕	井上 元	今城 俊浩	上田 陽一
臼井 健	海老原 健	大石 充	大谷健太郎	大津留 晶	尾形真規子	小川 佳宏
荻野 和秀	小倉彩世子	尾上 健児	柿添 豊	笠原 正登	柏原 直樹	方波見卓行
勝田 秀紀	勝谷 友宏	加藤 丈司	神出 計	唐島 成宙	川上 利香	岸 拓弥
岸本 一郎	北見 裕	北村 和雄	衣川 徹	木下 秀之	日下部 徹	熊谷 裕生
栗原 裕基	桑原宏一郎	栗原 孝成	上月 正博	児島 将康	此下 忠志	小林 直彦
小松 弥郷	小室 一成	斎藤 能彦	酒井 寿郎	坂本 昌也	笹野 公伸	篠村 裕之
佐田 政隆	佐藤 敦久	佐藤 貴弘	佐藤 文俊	佐藤 稔	沢村 達也	柴田 洋孝
島袋 充生	清水 逸平	下澤 達雄	下平 雅規	新藤 隆行	菅波 孝祥	菅原 明
杉本 研	杉山 徹	須田 道雄	曾根 正勝	園山 拓洋	染川 智	高橋 和広
高橋 克敏	高橋 貞夫	高橋 将文	鷹見 洋一	竹越 一博	武田 憲文	竹田 征治
田中 智洋	田中 愛	田辺 晶代	谷山 義明	種本 雅之	田村 功一	田村 尚久
土屋恭一郎	鶴田 敏博	寺田 典生	土居健太郎	東口 治弘	徳留 健	富田奈留也
永江 徹也	中岡 隆志	中神 啓徳	中川 修	中川 眞代	中川 靖章	長瀬 美樹
長田 太助	中谷 公彦	中西 道郎	中野 茂	中元 秀友	永谷 憲歳	中山 智祥
中山 雅文	名越 智古	錦見 俊雄	西村 眞人	西山 成	野出 孝一	萩原 啓実
長谷川浩二	浜中 一郎	林 登志雄	原田 昌樹	東浦 勝浩	久留 一郎	人見 浩史
廣岡 良隆	廣瀬 卓男	深水 昭吉	福田 昇	古橋 眞人	古本 智夫	細田 公則
堀尾 武史	本間康一郎	前島 洋平	榎野 久士	益崎 裕章	三浦伸一郎	水野 雄二
光山 勝慶	南野 徹	宮内 卓	宮崎 均	宮里 幹也	宮下 和季	宮田 篤郎
宮本 恵宏	向山 政志	宗 友厚	茂木 正樹	森 潔	森 建文	森 泰清
森下 竜一	森本 聡	八十田明宏	柳沢 正史	山下 潤	山田 敬行	山原 研一
山本 啓二	山本 浩一	山本 繁樹	横井 秀基	吉賀 正亨	吉田 英昭	吉田 陽子
吉林 宗夫	吉村 道博	吉本 貴宣	米田 隆	樂木 宏実	脇野 修	

■2020年度新入会会員【15名】

小豆島健護	安達 裕助	安部えりこ	伊藤 祐規	川上 亮	小山 博之	上木 裕介
塚本俊一郎	徳永 信行	峯岸慎太郎	柳澤 洋	山田臣太郎	結城 真広	渡辺 大輔
渡邊 裕介						

第 24 回 日本心血管内分泌代謝学会 評議員・総会 書面審議記録

日 時 : 2021 年 3 月 12 日～3 月 31 日

場 所 : CVEM ホームページ

評議員数 : 184 名

正会員数 : 400 名

【承認事項】

第 1 号議案 役員選任の件

第 2 号議案 名誉会員・功労評議員の件

第 3 号議案 評議員の件

(1) 新評議員について

(2) 再任評議員について

第 4 号議案 学術総会会長の件

(1) 第 27 回 (2023 年度) 学術総会会長の件

第 5 号議案 令和元年度 (2019 年度) 会計報告の件

(1) 令和元年度 (2019 年度) 一般会計

(2) 第 23 回 (2019 年度) 学術総会会計

【報告事項】

第 1 号議案 各種委員会設立の件

第 2 号議案 長期会費未納会員の件

第 3 号議案 研究賞の件

(1) 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・永井良三賞の件

(2) 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞選考委員の選任について

(3) 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞／永井賞推薦委員の選任について

(4) 2021 年度若手研究奨励賞選考委員の選任について

第 4 号議案 学術総会準備状況の報告

第 25 回 (2021 年度) 学術総会

第 26 回 (2022 年度) 学術総会

第 5 号議案 会員数の現状報告

第 6 号議案 その他

(1) 会員連絡号の件

(2) 日本心血管内分泌代謝学会ホームページの件

2020 年度評議員会・総会については新型コロナの影響で第 24 回学術総会が web 形式となったため通常の開催ができず書面審議の形態となった。評議員会・総会の資料は CVEM ホームページに掲載し、書面審議依頼書をメール添付またはメール登録のない会員宛郵送により全会員に告知した。審議期限の 3 月 31 日までに評議員 61 名、一般会員 40 名から承認の回答があり、また、審議依頼書に期限までに回答のない場合は承認とみなす旨記載したのでほぼ全会員の承認が得られたものとみなされた。定款第 21 条で評議員会の承認には 2/3 以上の出席で過半数の賛成 (62 名以上)、定款第 26 条で総会の承認には 1/3 の出席で過半数の賛成 (98 名以上)が必要とあるので、今回の結果は評議員会と総会での承認が得られたものと判断できると考えられる。

各承認事項を以下に示す。

【承認事項】

第1号議案 役員選任の件

今年度総会で年齢規定により任期満了退任となる理事の該当者はなかった。4年の任期を満了する理事は市原淳弘(東京女子医科大学)、小川佳宏(九州大学)、柏原直樹(川崎医科大学)、栗原裕基(東京大学)、益崎裕章(琉球大学)、南野 徹(順天堂大学)、柳沢正史(筑波大学)の各理事で、いずれも再任されることが承認された。

新理事や新監事候補者の該当者はなかった。第25回学術総会会長付幹事候補として佐藤貴弘評議員(久留米大学 分子生命科学研究所 遺伝情報研究部門)が承認された。

第2号議案 名誉会員・功労評議員の件

名誉会員候補者として梅村 敏、小島 至、田中一成の各功労評議員がそれぞれ承認された。

功労評議員候補者として飯利太朗(聖マリアンナ医科大学)、北村和雄(宮崎大学)、倉林正彦(群馬大学)、七里眞義(北里大学)、菅原 照(大阪赤十字病院)、武田仁勇(浅ノ川総合病院)、徳留悟朗(東急株式会社 東急病院)、長谷部直幸(旭川医科大学)、林 晃一(東京歯科大学)、榊田 出(武田病院健診センター)の10名の各評議員がそれぞれ承認された。

第3号議案 評議員の件

(1) 新評議員について(任期:2021年3月総会~2024年総会)

令和2年度新評議員候補者として以下6名が承認された。

木下秀之、佐藤貴弘、田中 愛、泉 裕一郎、柿添 豊、廣瀬卓男の各氏。

(2) 再任評議員について(任期:2021年3月総会~2024年総会)

4年の任期を満了する任期満了評議員として、以下の50名の再任が承認された。

浅原哲子、池田恵一、石上友章、石川義弘、石田純治、泉家康宏、一色政志、大石 充、尾上健児、方波見卓行、勝田秀紀、衣川 徹、栗原裕基、此下忠志、佐田政隆、沢村達也、七里眞義、柴田洋孝、杉本 研、杉山 徹、曾根正勝、染川 智、高橋将文、竹越一博、武田憲文、竹田征治、田中智洋、田村功一、東口治弘、徳留悟朗、徳留 健、富田奈留也、中川 修、中川眞代、長田太助、中谷公彦、中元秀友、長谷川浩二、長谷部直幸、林 登志雄、深水昭吉、前島洋平、南野 徹、宮崎 均、宮里幹也、森 泰清、柳沢正史、山原研一、米田 隆、脇野 修の各評議員。

第4号議案 学術総会会長の件

(1) 第27回(2023年度)学術総会会長の件

第27回(2023年度)学術総会会長に下澤達雄理事(国際医療福祉大学 成田病院 臨床検査科)が承認された。

第5号議案 令和元年度(2019年度)会計報告の件

(1) 令和元年度(2019年度)一般会計

令和元年度の一般会計について、前期繰越金 20,180,208 円、会費収入 2,229,000 円、受取利息 119 円、高峰賞寄附金 1,000,000 円、中尾賞/永井賞寄附金 100,000 円、学術総会会計繰入金 315,000 円、収入合計 23,824,327 円、当期収入は 3,644,119 円、支出は印刷費 0 円、通信運搬費 140,894 円、人件

費 1,084,000 円、旅費交通費 67,680 円、YIA 表彰費（副賞）500,000 円、YIA 表彰費（記念品代）25,782 円、高峰賞関連費 984,629 円、中尾賞・永井賞関連費 100,000 円、負担金（振込手数料）14,030 円、各種委員会・会議費 23,491 円、事務局家賃 250,000 円、返金 3,000 円、支出合計 3,193,506 円、当期収支差額 450,613 円、次期繰越収支差額 20,630,821 円であった。

(2) 第 23 回 (2019 年度) 学術総会会計

第 23 回日本心血管内分泌代謝学会学術総会は 2019 年 12 月 14 日～15 日、神戸国際会議場で日本血管生物医学会、国際心臓研究学会日本部会との 3 学会合同開催で、451 名の参加者があり CVEM 単独で 180 人の参加者、演題は 90 題であった。学術総会の収支は、収入が 7,774,908 円、支出は 7,459,908 円で、納税充当引当金 315,000 円は学術総会会計繰入金口座に入金された。

菅波監事と長瀬監事により行われた監査より、一般会計報告および学術総会の会計処理は適正に行われている旨監査報告書が示され、上記会計報告は承認された。

各報告事項を以下に示す。

【報告事項】

第 1 号議案 各種委員会設立の件

本学会の執行部組織として以下の常設 3 委員会と臨時 1 委員会の設立が理事会で承認されたとの報告があった。

常設委員会

(1) 庶務委員会

学会員の資格等に関する事項を取り扱う目的で設立する。

委員長；向山政志（熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学）

(2) 財務委員会

学会の財務に関する事項を取り扱う目的で設立する。

委員長；吉村道博（東京慈恵会医科大学 循環器内科）

(3) 学術委員会

学会の学術に関する事項を取り扱う目的で設立する。

委員長；児島将康（久留米大学 分子生命科学研究所 遺伝情報研究部門）

臨時委員会

(4) 学術総会あり方委員会

2023 年以降の学術総会のあり方について常設 3 委員会委員長に第 27 回（2023 年）学術総会会長を含め検討する目的で設立する。

第 2 号議案 長期会費未納会員の件

2014 年から 2015 年までの会費未納者 13 名（一般会員 12 名、評議員 1 名）については、前年度末（平成 31 年 3 月末）までに会費を納入いただけなかったため自動的に退会処理したことを報告された。今後も 3 年以上会費未納者で会費納入にご賛同いただけない場合は自動的に退会処理することが理事会で承認されている旨報告された。

第 3 号議案 研究賞の件

第 3 号議案(1) 高峰讓吉賞・高峰讓吉研究奨励賞・中尾一和賞の件

第 24 回高峰讓吉賞・高峰讓吉研究奨励賞・第 3 回中尾一和賞選考委員会は 2020 年 9 月 28 日 web 会議で開催され、受賞者が決定された。

◆第 24 回 (2020 年度) 高峰讓吉賞 受賞者

向山政志（教授） 熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学

◆第24回(2020年度) 高峰譲吉研究奨励賞 受賞者

有馬勇一郎(助教) 熊本大学 医学部附属病院 循環器内科

吉田陽子(特任教授) 新潟大学 大学院医歯学総合研究科 循環器内科学・先進老化制御学

◆第3回(2020年度) 中尾一和賞 受賞者

武田朱公(准教授) 大阪大学 大学院医学系研究科 臨床遺伝子治療学寄附講座

第3号議案(2) 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞/永井賞選考委員の選任について

◆2021年度年度高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞/永井賞 選考委員の件

選考委員長:伊藤 裕(慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科)

年次会長: 児島将康(久留米大学 分子生命科学研究所 遺伝情報研究部門)

継続委員: 小室一成(東京大学 大学院医学系研究科 循環器内科学)

中川 修(国立循環器病研究センター研究所 分子生理部)

樂木宏実(大阪大学 大学院医学系研究科 老年・総合内科学)

候補者名:任期2年 2021年3月総会~2022年総会まで

下澤達雄(国際医療福祉大学 成田病院)

田村功一(横浜市立大学 医学部 循環器・腎臓・高血圧内科学)

南野 徹(順天堂大学 大学院医学研究科 循環器内科)

第3号議案(3) 高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞/永井賞 推薦委員の選任について

◆2021年度年度高峰譲吉賞・高峰譲吉研究奨励賞・中尾賞/永井賞 推薦委員の件

推薦委員長:小川佳宏(九州大学 大学院医学研究院 病態制御内科学)

委員:新藤隆行(信州大学 大学院医学系研究科 疾患予防医科学系専攻 循環病態学講座)

西山 成(香川大学 医学部 薬理学)

益崎裕章(琉球大学 大学院医学研究科 内分泌代謝・血液・膠原病内科学講座(第二内科))

吉村道博(東京慈恵会医科大学 循環器内科)

第3号議案(4) 2021年度 若手研究奨励賞 選考委員の選任について

◆2021年度 若手研究奨励賞(YIA) 選考委員の件

選考委員長(2021年度学術総会会長):

児島将康会長(久留米大学 分子生命科学研究所 遺伝情報研究部門)

継続委員:任期2年 2019年総会~2021年総会まで

武田憲文(東京大学 医学部附属病院 循環器内科)

土屋恭一郎(山梨大学 医学部 内科学講座 第三教室)

長谷川一宏(慶應義塾大学 医学部 腎臓内分泌代謝内科)

候補者名: 任期2年 2021年3月総会後~2022年総会まで

栗原孝成(熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学)

中野大介(香川大学 医学部 薬理学)

野村征太郎(東京大学 医学部附属病院 循環器内科)

第4号議案 学術総会準備状況の報告

第 25 回 (2021 年度) 学術総会 児島将康会長 (久留米大学 分子生命科学研究所 遺伝情報研究部門)

開催日 ; 2021 年 12 月 10 日 ~ 11 日

場所 ; 久留米シティープラザ (福岡県久留米市)

参加学会 ; 国際心臓研究学会日本部会 (山口大学医学部 機関病態内科学 矢野雅文教授)

高血圧関連疾患モデル学会 (信州大学医学部 分子病態学 沢村達也教授)

心筋生検研究会 (長崎大学医学部 循環器内科学 前村浩二教授)

日本血管生物医学会 (九州大学大学院 薬学研究院 米満吉和教授)

第 26 回 (2022 年度) 学術総会 向山政志会長 (熊本大学 大学院生命科学研究部 腎臓内科学)

開催日 ; 2022 年 10 月 12 日

場所 ; 京都国際会議場

参加学会 ; 国際高血圧学会 (慶應義塾大学医学部 腎臓内分泌代謝内科 伊藤 裕教授)

第 5 号議案 会員数の現状報告

2021 年 1 月 12 日現在

正会員	400 名	(年会費	3,000 円)	
評議員	157 名	(年会費	5,000 円)	※理事・監事・幹事除く
理事	22 名	(年会費	10,000 円)	
監事	2 名	(年会費	5,000 円)	
幹事	3 名	(年会費	5,000 円)	
功労評議員	80 名			
名誉会員	34 名			
会員合計	698 名	(2019 年 9 月 25 日時点では 725 名)		
全会員が年会費を納入した場合		会費収入	2,230,000 円	
参考 : 休会中の会員	43 名			

第 6 号議案 その他

(1) 会員連絡号の件

第 43 回理事会 (2019 年 12 月 13 日開催) で会員連絡号が冊子体からホームページ掲載による電子媒体へ変更することが承認されました。2020 年度の連絡号は 5 月になる予定です。

(2) 日本心血管内分泌代謝学会 ホームページの件

ホームページアドレス : <http://square.umin.ac.jp/cvem/>

掲載のご要望やご意見など、事務局までお寄せ下さい。